

再版本の《キズ》跡

—『別座鋪』版元不明本をめぐって—

本 間 正 幸

一、はじめに

子珊集出来一覽、さて／＼珍重、先一方は打破り候と相見え候。去来其外之もの共、大かたならず感心大悦、いさみ申候⁽¹⁾。

(元禄七年六月八日付杉風宛芭蕉書簡)

元禄七年夏、子珊の手になる『別座鋪』(子珊集)は江戸の書肆・西村宇兵衛方から刊行された。この書が刊行されるや、上方を中心に高い評価を集めたことは、右を始め、いくつかの書簡に知ることができらる。

猿蓑の追加(統猿蓑)、別座敷・炭俵のなりわたりおびたしく候⁽²⁾。

(元禄七年七月十日付曾良宛芭蕉書簡)

上方筋、別座敷・炭俵にて色めきわたり候⁽³⁾。

(元禄七年九月十日付杉風宛芭蕉書簡)

これらを見るかぎり、『別座鋪』は刊行当時から、後年七部集に位置付けられることになる『炭俵』『統猿蓑』といった撰集と並び称されてきたことがわかる。

まことに片々たる小冊子ではありますが、『炭俵』と共に「かゝるみ」を味ふべきものであります。

(日本名著全集江戸文芸之部第三卷『芭蕉全集』興文社・昭和四年刊、贊川^{とよかわ}他石解題)

本書の価値はかるみの風調を具現したところにある。

(『日本古典文学大辞典 簡約版』岩波書店・昭和六十一年刊、島居清氏稿)

今日に至ってもその評価は変わるものではなく、右の評言を見ても、『別座鋪』は依然《軽み》期を代表する撰集といつて過言ではないであろう。にもかかわらず、『別座鋪』の研究が『炭俵』『統猿蓑』と同じように進められてきたかといえ、必ずしもそうとはいえない状況にある。『炭俵』『統猿蓑』が比較的早くから《軽み》を

論じる際にしばしば取り上げられてきたのに比べれば、『別座鋪』の方は、芭蕉が一座した連句が一卷、発句が三句しか取られていないことも災いしてか、連句の注釈はその一卷（紫陽花や）歌仙に留まっているし、発句の方も芭蕉の句を除くとほとんど顧みられていない状況にある。諸本研究の方も、初版本と再版本に違いがあるということが指摘される程度で、それ以上に踏み込んだ調査は、いまだ行われていないように見受けられる。

拙稿『別座鋪』版本考―再版本の位置付けを中心に―（『連歌俳諧研究』第九十二号 平成九・三）は、そのような現状を受け、同書が抱える問題点を書誌的事項にしぼって報告したものであるが、いまだ未解決のまま残しておいた点も少なくない。その一つに本稿でこれから取り上げようとする版元不明本（再版本）の扱いは、ある。

いま、『別座鋪』の版本をおおまかに分類すれば、おおよそ次のようにならうか。

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>I、初版本</p> <ul style="list-style-type: none"> ・西村宇兵衛本（元禄七年日記本） |
| <p>II、再版本</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鶴本平蔵本（宝曆二年刊記本、宝曆四年の蓼太の序あり） ・橋屋治兵衛本（宝曆二年刊記本・刊年不明本、ともに蓼太の序なし） ・版元不明本（刊年不明本、蓼太の序なし） |

すでに知られているように、『別座鋪』の初版本と再版本には、字句の異同に関して大きな相違があり、一見ただけでは、別本ととらえられかねない様相を呈している。再版本（宝曆二年以降の版）の方は編集自体に杜撰な点が多く、必ずしも初版本の意志を反映しているとはいえないが、初版本は今日でも伝存するものが少なく（管見に入ったかぎりでは天理綿屋文庫本・愛知県立大学の二本のみ）、中興期以降の俳人たちはむしろその杜撰な再版本の方で長く『別座鋪』を鑑賞してきたものと考えられる。ということになれば、そのような粗本を通して享受された△軽み▽が、蕉門の意図した△軽み▽と同じものでありえたかどうか再考の余地はあろうし、そのような版本がどのような書肆によってどの程度広められてきたかということも、享受史を考えるうえで頭に置いていい事柄であらう。

前稿との重複を避け簡単に紹介するならば、再版本には大きく分けて、江戸の鶴本平蔵本、京の橋屋治兵衛本、そして版元不明本の三種類が存在する。それらの間に内容面での相違は存在せず（再版本はすべて同版と推測される）、いずれも細かな寸法・装丁・刊記の差にとどまっている。大きな違いといえば、鶴本の「宝曆二年」版にのみ蓼太の序が付されており、その序の年記が「宝曆四年」となっている点があげられようか。これが単なる誤刻ではないとするならば、この本は刊記に「宝曆二年」とあっても、実際には宝曆四年に刊行されたものと見なければならぬことになる（ただし、本稿では混乱を避けるため「宝曆二年版」の呼び方で統一することと

する)。別稿(前掲)でも指摘したとおり、鶴本はこれに先立って蓼太の序のない「宝曆二年」版を刊行していたものと推測されるが、その原本ははまだ管見に入っていない。

今日、鶴本はその「宝曆二年」版(東大竹冷文庫蔵)一本を目にするのみだが、橋屋は同書を何回かにわたって増刷したらしく、刊記や装丁の異なつた版本がいくつも見受けられる。ただし、刊年の明記されているものは「宝曆二年」版のみであり、それ以外のものの正確な刊年はやはり判然としない。刊記の形態等から考へるに、橋屋は鶴本から「宝曆二年」版の版木を譲り受け、版元名を彫り直して刊行したものと思われるが、その版木がいつ譲渡されたかについても現時点では不明という以外にない。

これ以外にどちらの版とも知れない版元不明本が見られるが、いまその書誌を簡単に紹介すれば、おおよそ次のようにならうか。

①東京大学総合図書館本(E三二一—八二)

半紙本(二十一・六×十五・一糎)。黄土色無紋表紙(改装・洋装本仕立て)。題笈欠(左肩に「別座鋪」と打ち付け書き)。全二十五丁。刊記なし。

②天理図書館綿屋文庫本(わ七二—七八)

半紙本(二十一・三×一六・〇糎)。朱色「雷文繫ぎ菱に千鳥」模様表紙(改装)。題笈欠(左肩に「別ざしき」と打ち付け書き)。全二十五丁。刊記なし。

③天理図書館綿屋文庫本(わ二一—八五)

半紙本(二十一・五×十六・〇糎)。薄墨色無紋表紙(原

装)。題笈「別座鋪 全二(中・刷)。全二十五丁。刊記なし。

④香川大学付属図書館神原文庫本(九一一—三三)

半紙本(二十一・五×十六・二糎)。紺色無紋表紙(原装)。題笈「別座鋪 全」(左・刷、桃色刷毛模様)。全二十五丁。刊記なし。

⑤秋田県立図書館時雨庵文庫本(時二〇〇—一六七—七八)

半紙本(二十一・四×十六・三糎)。紺色無紋表紙(原装)。題笈「別座鋪 全」(左・刷、桃色刷毛模様)。全二十五丁。刊記なし。〔備考〕④と同本。

⑥西尾市立図書館岩瀬文庫本(七八九七—注七六—八七)

半紙本(二十一・八×十六・四糎)。白地に紺の「麻の葉地に小菊と若松の丸散らし」模様表紙(原装)。題笈「別座鋪 全」(左・刷)。全二十五丁。刊記なし。

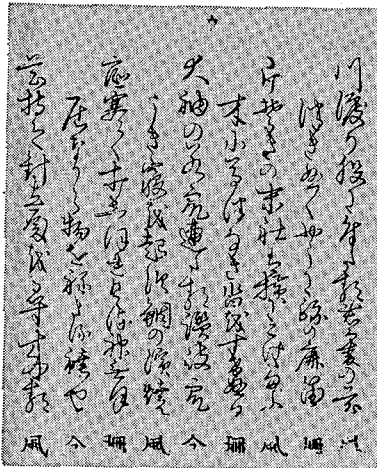
これを見ると、①の寸法だけ極端に小さいことがわかるが、これは和装本を洋装本に改装する際に上下左右を裁断したことが原因と考えられる。それ以外は⑥がやや大きめかといった程度で、細かな寸法にも目立った差異は見られない。④と⑤が同本と思われる以外は表紙の色・題笈の位置もまちまちであり、これらが橋屋・鶴本どちらの系列に属するものかを確と断定することは難しいように感じられる。しかし、それを見分ける手段がまったくないかといえは、必ずしもそうと決まったわけではない。ほかでもない。橋屋本特有の△キズ▽跡を残す本をここから探し出せばよいのである。

二、《キズ》跡のありか

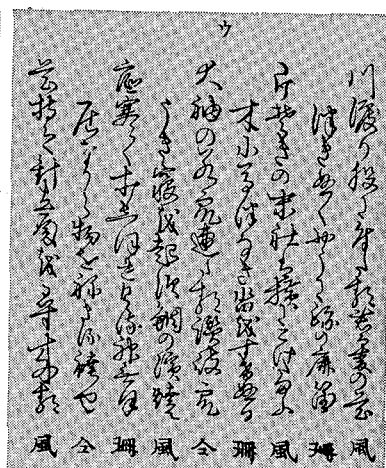
いま橘屋の「宝暦二年」版、なかでも比較的状态のよい東大洒竹文庫（酒三三五）本を基準に考えることにしよう。これ以外の「宝暦二年」版（松宇文庫本・中之島図書館本・愛知県立大学本）も含め、橘屋治兵衛名義の再版本にはすべて、鶴本の「宝暦二年」版（東大竹冷文庫・竹一三九本）には見られなかった《キズ》跡が散見される。主にその《キズ》跡は発句（もしくは連句）下の作者名の部分（句座）に見られるが、もっともわかりやすい「十」丁目表（丁数は柱刻に記されたもの。以下「一」で示す丁数はすべて柱刻に記されたものとする）の例を鶴本の「宝暦二年」版と対比させながら示せば、下図のようにならうか。

写真ではわかりにくい部分があるかもしれないが、橘屋本には句座のほとんどに《キズ》跡が見られることがわかる。そして、その鋭角的な文字の切れ方は印刷時の不注意等で出来たものではなく、明らかに版木に付いた《キズ》によるものと考えられる。同種の《キズ》跡は細かいものを含めると全体で数十箇所にわたるが、いま句座に付いたものに限って目に付いたもの（ただし鶴本本に見られなかった《キズ》跡に限る）を拾い上げれば、本稿末尾に掲げた《表1》のようにならうか。

さらに、《表1》にはそれを先の版元不明本に当てはめた結果も示してみた。一見して①〜⑥すべての版本に多くの《キズ》跡が見



橘屋治兵衛版
東大洒竹文庫
酒3355本



鶴本平蔵版
東大竹冷文庫
竹139本

られることがわかるが、逆に⑥には△キズ▽跡がほとんど見られないこともわかる。ということになれば、⑥のみは他の五本と版面の傾向が異なっているということになる。おそらくこの一本だけは鶴本本の一冊と扱ってよいのではないだろうか。そして鶴本の書肆としての活動が短期間に限られていた事実を目を向ければ、この本のおよその刊年を推測することも可能となる。『享保以後／江戸出版書目 新訂版』朝倉治彦・大和博幸編・臨川書店・平成五年刊に翻刻される割印帳を見るかぎり、鶴本の活動は、ほぼ寛延二年から宝暦六年の八年間に集中していたようであり、それに従えば、この本も『別座鋪』の再版本が最初に刊行された宝暦二年以降、同六年に至るまでの五年間に刊行されたものと見てよいことになる。振り返ってみれば、⑥は原裝表紙をもつものの中で唯一刷り模様入りの表紙を施していたし、僅かな差ではあるが、他のものに比べて寸法が大きめでもあったのである。はからずも版元の違いは些細な体裁面に現れていたといわねばならないであろう。

これ以外の①～⑤はいずれも橋屋の「宝暦二年」版と重なる△キズ▽跡を多く残しているが、③以外は「宝暦二年」版に比べると△キズ▽跡が「十」丁目から「十五」丁目に集中していることがわかる。そして、「△キズ▽跡が少ない方が先に刷られたもの」という原則に照らし合わせれば、③を除く四本は鶴本の「宝暦二年」版ならびに⑥本と、橋屋の「宝暦二年」版の間に刷られたものという結論が導き出されることにもなる(③も時期的には他の四本と同じ頃に位置付けられるが、他より△キズ▽跡が多く見られる点、もっ

とも「宝暦二年」版に近い時期に刷られたものと推測される)。

では、その書肆を鶴本・橋屋のどちらに決してよいかという問題になるが、これはおおよそ橋屋本と見てよいのではないだろうか。「宝暦二年」版の鶴本本にほとんど見られなかった△キズ▽跡が、印刷による磨耗の結果、急にこれだけできたとは考えにくい。ここはむしろ、版木譲渡の際(もしくはその後)に何らかの事情によって版木の「十」丁目から「十五」丁目に欠損が生じたと考えた方がいいように思われるのである(特に写真で示した「十」丁目の例は、明らかに版木に何らかの事情が生じたことを物語っている)。おそらく橋屋は、鶴本から版木を譲渡された後、この「十」丁目から「十五」丁目に△キズ▽の入った版木を用い、版元名を伏して何種類かの再版本を刊行し、そのうち「宝暦二年」版を刊行したのではないだろうか。それ以外の部分に見られる細かな△キズ▽跡は版木を譲渡されてから「宝暦二年」版を刊行するまでの間に新たにできたものと見ていいように思われるのである。ということになれば、橋屋本の刊記で刊年が「宝暦二年」と記されてはいても、実際の刊年はそれより(鶴本の「宝暦二年」版の実際の刊年である宝暦四年より)かなり遅れるものと見るのが妥当ということになる。

三、『芭蕉翁行状記』の場合

しかも、そのような現象はひとり『別座鋪』に限って見られるものではなかった。鶴本はこの前(寛延四)年にも『芭蕉翁行状記』

の再版本を刊行しているが、橋屋も同じようにこの再版本を手掛けているのである。これも『別座鋪』同様、橋屋は鶴本から版木を譲り受ける形で刊行したものと推測されるが、そちらの版木にも同じように、いくつか《キズ》跡が見られるのである。
やはり最初に『芭蕉翁行状記』の版本をおおまかに分類すれば、次のようにならうか。

- | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| I、初版本
・井筒屋庄兵衛本（元禄七年年記本） |
| II、再版本
・鶴本平蔵本（寛延四年刊記本、后臥・紀逸の序あり）
・橋屋治兵衛本（刊年不明本、后臥・紀逸の序のあるものとなしものとあり）
・版元不明本（刊年不明本、后臥・紀逸の序のあるものとなしものとあり） |

これも初版本と再版本の間に字句の異同等が見られるが、いま版元不明本の書誌に限って紹介すれば、おおよそ次のようにならうか。

- ⑦ 東京大学総合図書館酒竹文庫本（酒二七四二）
 半紙本（二十一・七×十五・八糎）。薄緑色無紋表紙（原裝）。題簽「芭蕉翁行状記 完」（左・書）。全二十六丁。后臥・紀逸の序あり。刊記なし。
- ⑧ 金城学院大学付属図書館本（九一一・三二・Y六二）
 半紙本（二十一・四×十六・三糎）。薄茶色無紋表紙（原

裝。題簽「芭蕉翁行状記」（中・刷）。全二十六丁。后臥・紀逸の序あり。刊記なし。

⑨ 今治市河野美術館本（三六一—一〇五六）

半紙本（二十一・八×十五・六糎）。緑色無紋表紙（原裝）。題簽「俳諧／芭蕉行状記 全」（左・刷）。全二十六丁。后臥・紀逸の序あり。刊記なし。

⑩ 筑波大学中央図書館本（ル二二四—一三二）

半紙本（二十一・五×一六・〇糎）。白地に紺の「麻の葉地に小菊と若松の散らし」模様（原裝）。題簽「芭蕉翁行状記 全」（左・書）。全二十六丁。后臥・紀逸の序あり。刊記なし。

⑪ 早稲田大学中央図書館本（八五一—一九三七）

半紙本（二十一・八×十五・八糎）。緑色無紋表紙（原裝）。題簽「芭蕉翁行状記 全」（左・書）。全二十六丁。后臥・紀逸の序あり。刊記なし。

⑫ 東京大学総合図書館竹冷文庫本（竹三〇八）

半紙本（二十一・六×十六・一糎）。緑色無紋表紙（原裝）。題簽「俳諧／芭蕉行状記 全」（中・刷）。全二十六丁。后逸の序あり。刊記なし。

⑬ 京都大学文学部源原文庫本（日一—一三二）

半紙本（二十一・四×十六・一糎）。薄墨色無紋表紙（原裝）。題簽「俳諧／芭蕉行状記 全」（中・刷）。全二十六丁。后臥・紀逸の序あり。刊記なし。（備考）表紙の色が

『別座鋪』③本と同じ。題簽は⑫と同じ。

⑭柿衛文庫本（二〇〇三）

半紙本（二二・五×十六・一糎）。薄茶色無紋表紙（原裝）。題簽「芭蕉行狀記 全亡（中・刷）。全二十六丁。后臥・紀逸の序あり。刊記なし。

⑮山口大学付属図書館棲息堂文庫本（M九二・三二・Y二六）

半紙本（二二・五×十六・一糎）。白地に紺の「麻の葉地に小菊と若松の丸散らし」模様表紙（原裝）。題簽「俳諧／はせお行狀記」（左・書）。全二十六丁。后臥・紀逸の序あり。刊記なし。「備考」⑩と同本か。『別座鋪』⑥本とも表紙の模様が同じ。

⑯天理図書館綿屋文庫本（わ七三・一三。旧番号わ七三・四九）

半紙本（二二・四×十六・三糎）。縹色無紋表紙（原裝）。題簽「俳諧／芭蕉行狀記」（中・刷）。全二十四丁。后臥・紀逸の序なし。刊記なし。「備考」題簽が⑬と同じ。

⑰天理図書館綿屋文庫本（わ一五〇・一七）

半紙本（二一・四×十五・九糎）。薄茶色無紋表紙（改裝）。題簽「春の日 全」（中・書・桑染色）。表紙左肩に「芭蕉翁行狀記紀逸本」と打ち付け書き（表紙には他には他二本の書名を記す。もと写本の表紙を代用したものか）。全二十六丁。后臥・紀逸の序あり。刊記なし。

『國書総目録』は右以外にも聖心女子大学本・学習院大学本・旧下郷文庫本・栗田文庫本を刊年不明本としてあげるが、聖心・学習

院本は問い合せたところ所在不明、旧下郷文庫本は戦火消失、栗田文庫本は個人蔵で、現在蔵書未整理のため、今回は閲覧不能であった。ここはこの四本を除く十一本を対象に調査を加えたいと思う。

一見して気付く特徴は、『別座鋪』の版元不明本とは異なり、ほとんどが薄茶色か縹色の表紙を用いていること、また⑬にのみ后臥・紀逸の序が欠けている（したがって他のものに比べ丁数が二丁少ない）こと、加えて題簽で書名を「芭蕉翁行狀記」とするもの（⑦⑧⑩⑪）と「芭蕉行狀記」とするもの（⑨⑫⑬⑭⑯）に大きく二分されることであろうか。さらにあげるならば⑯のみ寸法が若干小さめであることが指摘できるが、これは改装の際、上下を裁断したことが原因と考えられる。

これも、版元名の明記されている橋屋本を基準に調査すべきであるが、現在版元名が付されている橋屋本は、河野美術館本（四〇一―一三六〇）と松宇文庫本（二七三―一八一四）の二本（ともに刊年は不明）に限られる。河野美術館本（『芭蕉翁正伝集』との合綴本）は文字のカスレも多く、版面の状態はよいとはいえないが、現在、松宇文庫本の原本が閲覧不能である以上、今回はこれを基準に調査したいと思う。こちらは『別座鋪』に比べると全体的に△キズ▽の跡は小さいが、やはり随所に多くの痕跡を認めることができる。これに関しても、句座の部分に限って、特に目に付いた△キズ▽跡（やはり鶴本の寛延四年版に見られなかったものに限る）を拾い上げ、先の⑦⑧に当てはめた結果を示すならば、やはり、本稿末尾の△表2▽のようにならうか。

やはり《キズ》跡は全体に均等に見られるのではなく、「十二」丁目・「十二」丁目に集中して現れていることがわかる。これらはやはり橋屋本特有の《キズ》跡といつていいであろう。そして⑩⑪⑫を除いたすべての本に橋屋本と重なる《キズ》跡を見ることができるのである。これに従えば、《キズ》跡に多寡の違いはあるものの、この三本を除く八本は、おおよそ橋屋の刊行したものと見てよいことになろうし、逆に《キズ》跡が見られない⑬⑭⑮の三本は鶴本本の一つと扱つてよいことになる。これも「《キズ》跡の少ないものの方が先に刷られた」という原則に照らし合わせれば、橋屋の版元記載本よりも版元不明本の方が先に刊行されたということになり、刊行の事情は『別座鋪』の場合とほぼ同じであつたと推測される。

いま、他の書肆（たとえば橋屋が早くから配下に収めていたとされる京の柏屋勘右衛門など）の刊行物と橋屋の刊行物の間にも同様のことが指摘できるかどうか調査の域を広げる余裕はないし、なぜ橋屋の再版本にのみ共通してこのような《キズ》跡が生じたのか理由も不明であるが、この《キズ》跡の有無は、句座以外の部分も含めたさらに厳密な調査が必要であるとはいへ、版元不明本の書肆を特定するひとつの手掛かりになるといいように思われるのである。

四、書肆・橋屋治兵衛の位置

以上、『別座鋪』の版元不明本がどの書肆から刊行されたもので

あつたかをめぐつて、思うところを述べてきた。些末といへばそうともとれる事柄であるが、この調査を通じて改めて確認出来たのは『別座鋪』の普及において「橋屋」という書肆が果たした役割の大きさであつた。現在所在の確認のできる『別座鋪』の再版本は、版元不明本も含めると、合計で十五本にのぼる。その内、今回の調査でおおよそ書肆が判明したものを含めると、橋屋はそのうちの十三本、再版本全体の八十七%を占めていたことになるのである。橋屋本は後年『俳諧新七部集』（文化十一年刊）や『新撰／俳諧七部集』（天保九年刊）の底本にも取られることになるが、それを見ても、橋屋が宝暦年間以降八十年以上の長きにわたつて『別座鋪』の普及に影響力を持ち続けてきたことが推測される。

しかも、橋屋が果たした役割はそれに限られるものではなかつた。早くから支考以下、美濃派や伊勢派の俳書を刊行するとともに、蕉門関係の俳書を多数復刊し、復古運動にも大きく寄与しているのであり、橋屋が蕉風の伝播に果たした役割は俳諧史に留められるべき価値をもつといえよう。

明和七年、橋屋は芭蕉八十回忌の取り越し法要において、義仲寺に建立された芭蕉堂に井筒屋とともに石灯籠を寄進し、次のような発句を残している。

石燈籠を寄附し奉るとて

月花の道の光りをかき立ん

幾世てれ臘月にも秋の世も

書林井筒屋庄兵衛

同 橋屋次兵衛

（明和七年刊『施主名録発句集』）

奇しくも橋屋が「蕉門俳諧書林」という「大灯籠」を掲げ、本格的に復古運動に乗り出すのは、この頃を境にすることであった。⁽⁹⁾橋屋自身の手になる『蕉門俳書目録』（東大酒竹文庫蔵）によれば、『別座鋪』はおおよそ安永四〜六年頃に一度刊行されたものと推測されるが、橋屋が『別座鋪』を再刊したのはそれ一度きりではなかったであろう。装丁や刊記の形を異にする版本が多く残されている点を見ても、『別座鋪』は芭蕉の大きな回忌などの折に『炭俵』調の代表的撰集として繰り返し刊行されたものと考えられるのである（特に⑩は表紙に薄墨色が用いられており、芭蕉の回忌にあわせて刊行された可能性が高いといえよう）。

そして、近代に入って橋屋が活動を停止してからも、この再版本は多くの俳人や俳句研究者たちの間を渡り歩き、読み継がれているものと推測される。再版本に残された蔵書印をうかがうに、角田竹冷・大野洒竹を始め、斎藤雀志・伊藤松宇・勝峰晋風・岡田利兵衛・安藤和風といった錚々たる面々が旧蔵者に名を列ねているのである。日本名著全集第三巻『芭蕉全集』（前掲）の解題で賛川他石が「此書の元禄版は至つて乏しく」と綴っていることはもとより、鶴本の再版本に取められる序文で、蓼太自身が『別座鋪』に初めて出会った驚きを「典籍の壁中を出たる心地す」と述べている点を見ても、『別座鋪』の初版本は江戸時代から相当手に入りにくかったものと推測される。したがって『別座鋪』の普及という点に関してのみ、杜撰な編集ながらこの再版本が果たした役割も少なくなくかつたといつていいであろう。初版本の翻刻を収めた『蕉門珍書百種』

『日本俳書体系』のシリーズが刊行され始めたのは大正も末に至つてのことであるし、『別座鋪』の初版本自体が天理図書館綿屋文庫に取められ、広く閲覧の便が計られたのは、昭和も二十年代に入つてからのことだったのである。

〈注〉

- (1) 引用は『校本芭蕉全集 別巻 補遺篇』（富士見書房・平成三年刊）による。
- (2) 引用は『校本芭蕉全集 第八巻 書翰篇』（富士見書房・平成元年刊）による。
- (3) 同右。
- (4) いま、その一例を浄求餞別吟とその前書に限って示すならば、おおよそ次のようにならうか（句読点・濁点は引用者が私に施すこととする。さらに違いがはっきりわかるよう適宜改行を加え、違いが見られ

初 版 本	再 版 本
<p>深川の辺に浄求といへる道心あり。 愚智文盲にして正直一扁の者也。 常に翁につかへて、ちいさき草の戸を得たり。 朝夕芭蕉庵の茶を煮し事、妙なり。 此度門人餞別の句を綴る。浄求の 聞居て、愚も一句せんと云。 みな腹を抱てとへ、指折文字を算てかくといふ。おの／＼笑あへる事、妙時やます。されども、</p>	<p>深川の辺に浄求といへる道心あり。 愚智文盲にして正直一扁の者なり。 常に翁につかへて、ちいさき草の戸を得たり。 朝夕芭蕉庵の茶を煮し事、妙なり。 門人餞別の句を綴る聞居て、愚も一句せんと云て指折文字を算て斯と云。 各笑ひあへる事、やます。 され共、愚成者の心を量てしるし</p>

愚成ものゝ心を量てしるし侍る。
はなむけ餅やさらば柏餅 浄求

侍る。
はなむけ餅やさらばかしは餅
浄求

る部分に限って網線を施すこととする。

右から、再版本では、句作の場の臨場感が失われ、単なる事情説明に終わっていることが看取されよう。再版本での語句の改変はこれ一例にとどまるものではない。

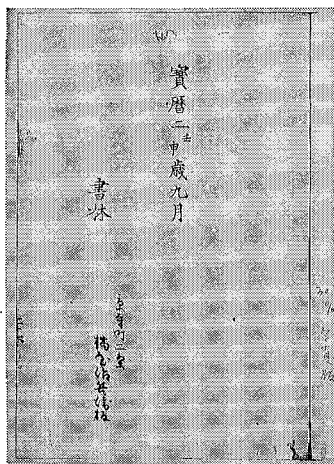
(5) いま鶴本の「宝暦二年」版と橘屋の「宝暦二年」版の刊記を対比させながら示せば下図のようにならうか。

橘屋の他の版本に同種の刊記が見られないのみならず、『都老子』(宝暦二年刊)・『竜宮船』(宝暦四年刊)・『雑話抄』(宝暦四年刊)といった鶴本の刊記に似たものが見られている点を見ても、これがもともとは鶴本の刊記であったことは疑いないであろう。ここから、橘屋の「宝暦二年」版は鶴本の「宝暦二年」版の刊記から「東都」を削り、版元名を改刻して刊行したものと推測することができる。

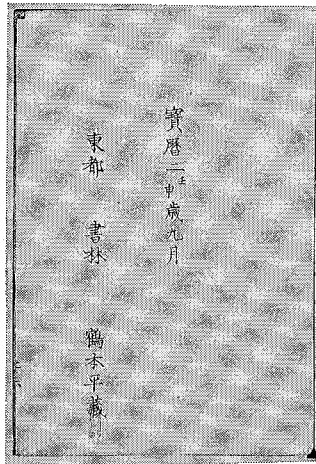
(6) 『芭蕉翁行状記』の版本全体に関する書誌的調査は稿を改めて紹介したいと思う。

(7) 栗田元次氏『書誌学の発達』(日本書誌学大系8・青裳堂書店 昭和五十四年刊)には付録として「栗田文庫善本書目」(昭和十五年時のもの)が取められるが、残念ながらそこに『芭蕉翁行状記』は取られていない。

(8) 本稿で鶴本本と推測した『芭蕉翁行状記』の⑩⑪二本は、先にあげた『別座鋪』の⑥本(やはり鶴本本と推測される)と寸法こそ若干違うものの、表紙の模様・丁数がほぼ同じである。また、本稿で橘屋本と推測した『芭蕉翁行状記』の⑬本は『別座鋪』の③本(やはり橘屋本と推測される)と表紙の模様・寸法・丁数等がほぼ同じである。こ



橘屋治兵衛版
東大酒竹文庫
酒3355本



鶴本平藏版
東大竹冷文庫
竹139本

から推測すれば、これらがいつの再版本かは不明だが、鶴本の意識の中にも橋屋の意識の中にも一時期『別座鋪』と『芭蕉翁行状記』をセットで刊行しようとする意志があったと見ることも許されよう(実際、鶴本に関していえば、蕉門系俳書の復刊はこの二本に限られてもいるのである)。

(9) 橋屋が出版物の刊記で「蕉門(俳諧)書林」を名乗ったのは、『高軒』(麦阿編・享保十九年)が早い例と考えられる。その後、『合点游』(推挹編・享保十九年刊)・『袖みやげ』(片石編・享保二十一年跋)など、享保十九〜二十一年にかけて、麦阿がらみの俳書に集中的にこの称号を用いている(『高軒』は麦阿本人の編者、『合点游』は麦阿の句を入集した撰集、『袖みやげ』は出羽俳人・片石が麦阿への国土産として上梓した撰集)。その後、支考十三回忌に編まれた『黄山西法会』(白話有琴編・寛保三年跋)にも使用例が見られるが、橋屋が本格的にこの称号を使用したのは、明和六〜七年の義仲寺における芭蕉堂再建法要とその記念集が刊行された頃を境にすることと推測される。明和六年の『画一庵稿詩歌之部』には、蕉門書林 皇都橋屋治兵衛という刊記を用いているし、明和七年の『施主名録発句集』では井筒屋庄兵衛・伊勢屋正三郎と三肆連名で「蕉門俳諧書林」の称号を名乗っている。以後、安永三年から寛政年間にかけては、井筒屋庄兵衛と連名でこの称号を名乗り、蝶夢が編んだ蕉門系俳書などを多数刊行しているが、参考までにいくつか書名をあげれば次のようになるうか。

『寸草発句集』(蝶夢編・安永三年刊)、『落柿舎日記』(重厚編・安永三年序)、『芭蕉翁文集』(蝶夢編・安永五年序)、『蕉門俳諧語録』(蝶夢編・安永六年刊)、『古今句集』(鬼子編・天明四年序)、『芭蕉翁俳諧集』(蝶夢編・天明六年刊)、『芭蕉翁発句集』(蝶夢編・寛政元年刊)、『おくのほそ道』(芭蕉著・寛政元年刊)、『芭

蕉翁絵詞伝』(蝶夢著・寛政五年奥)、『祖翁百回忌』(蝶夢編・寛政六年刊)など

(10) 同書において『別座鋪』は『芭蕉翁文集』(蝶夢編・安永五年序)・『花入塚』(青板編・安永五年跋)・『神の櫻』(原阿坊編・安永四年刊)・『わすれ梅』(尚白編・安永六年刊)などと同じ丁に掲載される(売り値は二匁)。同書で『別座鋪』が掲載されるのはこの丁のみ)。同書は必ずしも出版物を厳密に配列しているわけではないが、同じ頃に行されたものを一括して掲載する傾向があるところから、『別座鋪』もこの頃に一度刊行されたものと推測される(ちなみに『芭蕉翁行状記』も同じ丁に掲載されている)。

(11) 『出版文化の源流』京都書肆菱屋史 江戸時代〜昭和二十年代』(海青社・平成七年刊)によれば、橋屋は「嘉永年間を境に、それ以後の発行をみないで販売専業で明治初期頃まで営業した」とのことであり、「明治七年の名簿(『第一書籍商社』)を最後にその名をみない」ということだが、これに限らず橋屋の出版活動に関しては今後解明されるべき問題点が多いといえよう。

参 考 鶴 本 本	橋 屋 本	版 元 不 明 本						宝 曆 二 年 版 橋 屋 本 の 《 キ ズ 》 跡 (鶴 本 本 に は 見 ら れ な い も の)	行 数	丁 数	
		⑥ 西 尾	⑤ 秋 田	④ 香 川	③ 天 理	② 天 理	① 東 大				
×	○	×	×	×	○	×	×	「桑」	2	5オ	
×	○	×	×	×	○	×	×	「鄰」	9		
×	○	×	×	×	○	×	×	「鄰」	9	7オ	
×	○	×	×	×	○	×	×	「水」	1	8オ	
×	○	×	×	×	○	×	×	「風」	6	9オ	
×	○	○	○	○	○	○	○	「風」	3	10オ	
×	○	×	○	○	○	○	○	「珊」	4		
×	○	×	○	○	○	○	○	「全」	5		
×	○	×	○	○	○	○	○	「風」	6		
×	○	×	○	○	○	○	○	「珊」	7		
×	○	×	○	○	○	○	○	「全」	8		
×	○	×	○	○	○	○	○	「風」	9		
×	○	×	○	○	○	○	○	「風」	1		10ウ
×	○	○	○	○	○	○	○	「杉風」の「風」	5		
×	○	×	○	○	○	○	○	「風」	2		11オ
×	○	×	○	○	○	○	○	「全」	9		
×	○	○	○	○	○	○	○	「全」	6	11ウ	
×	○	○	○	○	○	○	○	「波」	7		
×	○	×	○	○	○	○	○	「全」	8		
×	○	×	○	○	○	○	○	「風」	9	12オ	
×	○	×	×	×	×	×	×	「全」	5		
×	○	×	○	○	○	○	×	「風」	8	12ウ	
×	○	×	×	×	×	×	×	「波」	1		
×	○	×	○	○	○	○	○	「桃鄰」の「鄰」	2	15オ	
×	○	×	○	○	○	○	○	「藩波」の「波」	4		
×	○	×	○	○	○	○	○	「八桑」の「桑」	6		
×	○	×	○	○	○	○	○	「子珊」の「珊」	7		
×	○	×	○	○	○	○	○	「桃鄰」の「鄰」	8		
×	○	×	○	○	○	○	○	「杉風」の「風」	9	15ウ	
×	○	×	○	○	○	○	○	「子珊」の「珊」	2		
×	○	×	×	×	×	×	×	「桃鄰」の「鄰」	5	16オ	
×	○	×	×	×	×	×	×	「岸露」の「露」	6	16ウ	
×	○	×	×	×	×	×	×	「芭蕉」の「蕉」	1	17オ	
×	○	×	×	×	×	×	×	「杉風」の「杉」	6		
×	○	×	×	×	○	×	×	「白之」の「白」	1	18オ	
×	○	×	×	×	×	×	×	「杉風」の「杉」	3		
×	○	×	×	×	○	×	×	「杉風」の「風」	7	18ウ	
×	○	×	×	×	○	×	×	「呂国」の「呂」	2	19オ	

△表1▽『別座鋪』版元不明本における《キズ》跡

※○は《キズ》跡が存在することを、×は《キズ》跡が存在しないことを、そして「虫」は虫損によって《キズ》跡が確認できなかったことを表す。○が多いものは橋屋の宝曆二年版に近いことを意味し、逆に×が多いものは鶴本の宝曆二年版に近いことを意味する（参考欄と比較すると傾向が明らかになるであろう）。さらに×の多いものの方が○の多いものより先に刷られたものと推測することができる。なお、右端に記した丁数は柱刻に従うこととする（「オ」は表、「ウ」は裏を表す）。

参 考	版 元 不 明 本											行 数	丁 数		
	鶴 橋	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒			㉓	
本 本	屋 本	天 理	天 理	山 口	柿 衛	京 大	竹 冷	早 大	筑 波	河 野	金 城	酒 竹			
×	○	×	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	「丹野」の「丹」	1	12オ
×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「正通」の「正」	3	
×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	「智月」の「智」	3	13オ
×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	「智月」の「月」	3	
×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	「土竜」の「土」	6	
×	○	×	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	「土竜」の「竜」	6	
×	○	×	×	×	○	×	×	○	×	○	×	○	「乙州」の「州」	8	
×	○	×	×	×	○	○	○	×	○	×	○	○	「智月」の「月」	9	
×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	「錦江」の「江」	1	15オ
×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	「乙州」の「乙」	4	18オ
×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	「土竜」の「土」	1	20オ
×	○	×	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	「桃隣」の「隣」	2	21オ
×	○	虫	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	「乃胡」の「胡」	2	22オ
×	○	×	×	×	○	○	○	×	○	○	○	○	「鳥白」の「白」	3	
×	○	×	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	「安世居士」の「居」	5	
×	○	×	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	「江山」の「山」	7	
×	○	×	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	「露王」の「王」	8	
×	○	×	○	×	○	×	○	○	×	○	×	○	「丹野」の「野」	9	
×	○	×	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	「百々」の「々」	3	22ウ
×	○	×	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	「不生」の「生」	3	23オ
×	○	×	×	×	○	×	○	×	○	×	○	○	「短長」の「短」	2	24オ

※表の見方は〈表1〉と同じ。○が多いものは橋屋の刊年不明版に近いことを、逆に×が多いものは鶴本の寛延四年版に近いことを意味する。

△表2▽『芭蕉翁行状記』版元不明本における△キズ▽跡

(ほんま・まさゆき 成城学園高等学校教諭)